

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26420653

研究課題名(和文) 中近世移行期における近世城下町の形成に関する建築・都市史的研究

研究課題名(英文) The Architectural and Urban Study of the Castle Town Formation in the Transitional Period from Late Medieval to Early Modern

研究代表者

登谷 伸宏 (TOYA, Nobuhiro)

京都橘大学・文学部・助教B

研究者番号：40447909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中近世移行期の城下町に注目し、形成過程とその特質を解明することを目的とした。具体的には、織田信長の家臣が越前国に建設した城下町 - 大野城下町・北庄城下町をとりあげ、両城下町の建設過程、空間的・社会的特質、および織田政権の建設した城下町における位置づけについて検討を加えた。

その結果、両城下町は、織田信長の建設した安土城下町と同様、既存の町場を城下へ統合し城郭を中心とする一元的な空間構造を達成していたこと、既存の町場に居住する商工業者を城下へ集住させ、社会的な一元化を実現したこと、かかる構造を有する城下町が織田政権による城下町建設の到達点のひとつであったことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：To reveal the spatial change of the castle towns in the transitional period from late medieval to early modern, I focused on the Ono and Kitanosho castle town in Echizen Province, which was constructed by the elite retainers of Nobunaga Oda in this study. And I analyzed their formation processes and characters of spatial-socio structure.

As the result, the followings are revealed. 1) Both towns had the spatial structure which unified the castle and the local town as same as the Azuchi castle town constructed by Nobunaga Oda. 2) Retainers relocated the commercial and industrial men who lived in the local town into the castle town, and kept them under control. 3) And this type was the achievement of Oda regime castle town construction.

研究分野：都市史

キーワード：城下町 織田政権 北陸

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、中近世移行期を対象とした城下町研究は蓄積を重ねており、戦国期城下町から織豊系城下町、そして近世城下町へ至る変容の過程が明らかにされている。先行研究によると、城下町の近世化は以下のように進化したと理解できる。すなわち、戦国期の城下町では、領主居館を中心とした家臣団、直屬商工業者の集住域と、在地の商工業者の形成する市町が二元的に併存していたが、織豊期に前者が後者を吸収し、領主による一元的な支配の実現した織豊期城下町が成立した、というものである。

しかしながら、そうした成果に対して、以下の疑問点や解明すべき課題を指摘することができる。

(1) 先行研究が提示した説は明瞭で説得力を持つが、一元的な城下町の形成がどの城下町でも同じように達成されたかどうかは明らかではない。したがって、各地・各時期の城下町形成がどのような過程で行われたのかについて、改めて検討する余地がある。

(2) 先行研究から欠落している論点として、「信仰」の問題がある。これまで、寺社は近世城下町の建設が進むなかで、宗教統制・城下町防衛のために限定された地区(=寺町)へ集められたとされる。だが、寺社は、本来領主や家臣団、地域に居住する人々の信仰の対象であり、支配や軍事の側面からのみで城下町との関係を論じきることにはできない。そのため、寺社の動向をふまえて城下町の形成を検討する必要がある。

(3) 城下町のなかには、港町・門前町などの既存の都市(町場)を内包、またはそれと隣接するかたちで建設される事例が多く見られる。領主権力は、その存在を前提として城下町の建設を進めたと考えられるが、先行研究では、領主権力が既存の都市空間とその特質をどのように継承したのかという問題については明らかにされてこなかった。このことは、近世城下町の先進性とは異なる「地域性」の側面を解明する上で重要な課題である。

## 2. 研究の目的

本研究では、以上の研究状況をふまえ、中近世移行期の城下町を対象として下記の3つの課題について検討することとした。

(1) 中近世移行期における城下町の形成過程について

織豊政権期における各地の城下町の事例から、城下町形成の諸段階を明らかにし、近世城下町の成立過程を再検討するとともに、それについて新たな説明を試みる。

(2) 城下町の形成と寺社

寺社と、領主権力・民衆との関係を信仰の側面から明らかにすることにより、その関係性が城内・城下における寺社の配置、地域における城下町の位置にどのような影響を及ぼしたのかを解明する。

(3) 既存の都市(町場)空間の継承

近世城下町が既存の都市・町場を内包、またはそれに隣接するかたちで建設された事例が多いことをふまえるならば、城下町形成における「地域性」、すなわち中世・戦国期までに各地で成立していた都市・町場の継承という論点についても詳細に究明する必要がある。そこで、各地の城下町が、既存の都市、および地域社会のあり方を如何に反映しながら形成されたのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究では、織豊政権により建設された織豊系城下町に焦点を絞り、上述した(1)～(3)について検討を行った。その際には、以下の手順により研究を進めた。

まず、織豊政権の建設した城下町に関する先行研究を分析し、先行研究の成果と課題を把握した。ついで、各自治体の発行した自治体史を利用して史料の収集を行うとともに、各地域の図書館・博物館など史料所蔵機関においても、文献史料・絵画史料の調査・収集を進めた。

さらに、城下町形成をより広い視野から理解するために、中世・近世の政治・社会構造、信仰のあり方、既存の都市の空間・社会の様相などを、文献史学・考古学・歴史地理学の成果をもとに整理した。

また、以上の作業を通して得られた情報をデータとしてPCに入力し、研究支援データベースの構築を行った。

## 4. 研究成果

3で述べた方法により史料の収集・整理・分析を進めるなかで、中近世移行期における城下町形成を明らかにするためには、織田信長の家臣が建設した城下町に注目する必要があるとの見通しを得た。それにもとづき、本研究では、金森長近の建設した大野城下町、柴田勝家の築いた北庄城下町を分析の対象として検討を進めた。その結果、以下の研究成果を得た。

なお、(2)で述べる北庄城下町の空間構造については、論文としてまとめて平成29年3月に『建築史学』へ投稿した。同年5月時点では審査中である。

(1) 大野城下町の形成について

戦国期の**大野** 大野は、越前国の東部、奥越に位置し、大野盆地とそれをとりまく山地からなる地域である。大野盆地には美濃国と越前国とを結ぶ美濃街道が通り、交通の要衝となっていた。現在の大野市街地を含む地域は土橋と呼ばれ、戦国大名朝倉氏の支配拠点となるとともに、土橋町という小規模な町場が形成されていた。

大野城下町の建設 天正3年(1575)、織田信長は、本願寺・一向一揆を攻撃するため、越前国に侵攻した。まもなく本願寺・一揆勢を壊滅させた信長は、掃討戦を行うため国内の都市・町場に放火した。その後、信長

は国内を所領として家臣に与え、大野郡は金森長近・原政茂の支配するところとなった。

大野郡へ入部した長近は、亀山に新たに大野城を造営するとともに、天正4年から城郭に隣接した平野部に城下町を建設した。長近の城下町建設のうち、同時代史料から明らかとなる点はわずかであり、天正6年頃までに土橋町を城下へ移転させたこと、町屋の計画的な配置を行ったこと、周辺の寺院を城下へ移したことが挙げられるのみである。しかしながら、給人居住域と地域の市町とを空間的・社会的に統合した一元的な城下町を建設したことは明らかであり、織田信長の家臣団のなかでも先進的な城下町を建設したとすることができる。

近世城下町への変容 現在の城下町は、碁盤目状の整然とした町割りがなされ、周縁部に寺院の建ち並ぶ寺町が形成されている。長近の段階でこうした城下町空間が成立していたかどうかは不明ながら、長近の後に大野へ入部した青木一矩の治世下、天正19年までには碁盤目状の町割りが形成されていたことがわかる。さらに、寺町でも文禄期までに寺院が建て揃っていることが確認できる。したがって、豊臣政権期には、③碁盤目状の町割り、⑤寺町を備えた近世城下町としての形式を調べていたとすることができよう。

大野城下町の歴史的位 置 大野城下町が、長近の段階で空間的・社会的に一元化した城下町として成立した要因として、長近の勢力基盤の脆弱さ、信長の侵攻による郡内の荒廃、および土橋の地理的条件が挙げられる。

長近は、大野へ入部するまでは信長の馬廻衆であり、それほど多く直属商工業者を抱えていたとは考えられない。したがって、新たな領国支配を進めるにあたって、地域の商工業者の掌握は喫緊の課題であった可能性が高い。さらに、信長が大野郡内を焼き討ちしたことにより、土橋町は大きく被災し、商工業者のなかには郡外へ移住しようとする者もいた。そうした状況において、商工業者の郡外への流出を防ぎ、領国支配の拠点として城下町の経済的機能を高めるためには、商工業者を直接的な支配下へ置き、城下へ集住させることが必要であった。これらが市町を城下へ統合し、空間的・社会的に一元化した城下町を建設する主要な要因であったと考えられる。

さらに、土橋町は、盆地内の平坦部に位置しており、その近傍に新たに堅固な城郭を造営することは困難であった。このことも既存の市町であった土橋町を新城下へ移転させた要因のひとつといえる。

これまで、天正4年に織田信長の建設した安土城下町は、空間的・社会的に一元化した構造を有し、織田政権による城下町建設の到達点と考えられてきた。しかしながら、以上の検討から、同時期の城下町でも同様の構造が実現されていた。さらに、先行研究で

も指摘があるように、羽柴秀吉の建設した長浜城下町も空間的な一元化を達成しており、安土城下町のみが先進的な城下町であるとはいえないことが明らかとなった。これら家臣団の城下町における一元的な構造は、所領における権力基盤の脆弱性、在地の町場の荒廃といった要因が重なることにより可能となったと考えられる。この点は、安土城下町とは異なる部分であり、城下町構造について、より詳細な検討が今後の検討課題である。

## (2) 北庄城下町の空間構造について

戦国期の足羽三ヶ庄 戦国期の越前平野には、北陸道と足羽川が交差する地点に北庄・石場・木田の集落からなる足羽三ヶ庄という町場が展開していた。三ヶ庄には、多くの寺社が所在するとともに、北庄には戦国大名朝倉氏の一族である土佐守家の居館が置かれた。三ヶ庄に居住する商工業者のうち、慶松氏・橘氏は有力な商人として活動しており、なかでも慶松氏は、朝倉氏の商人司として位置づけられていたと考えられる。

北庄城下町の建設 天正3年、織田信長は本願寺・一向一揆勢を討伐するため越前国に侵攻した。その際、三ヶ庄で大規模な戦闘が行われた記録はないものの、信長は戦闘を避け国外へ退去していた慶松氏へ、三ヶ庄に還住し速やかに小屋掛けするよう命じていることから、町場が被災したことはわかる。

三ヶ庄を中心とする八郡を与えられた柴田勝家は、北庄に城郭を造営するとともに、三ヶ庄を城下町として位置づけ、建設に着手した。北庄城下町の建設過程が明らかとなる史料はごく限られており、①町場の復興と一乗谷からの商工業者の移住、②惣構の建設、③一乗谷などからの寺社の移転を行ったことのみがわかる。

④については、商工業者の城下町への還住を進めるとともに、朝倉氏の拠点であった一乗谷から商工業者を移住させ、城下に新たに設けた一乗町に集住させた。これにより、城下の経済的な機能の充実を目指したと考えられる。さらに、勝家は柴田氏直属の商工業者を含めた、城下の商工業者支配を橘氏へ付託しており、地域の商工業者との社会的な一元化を進めたといえよう。橘氏は、三ヶ庄のうち木田を居所としていたことから、北庄・石場・木田は、すべて城下町として位置づけられ、空間的な一元化も達成されていたことがわかる。

⑤については、これまで北庄城と北庄を囲繞する惣構が設けられたとされてきた。しかしながら、羽柴秀吉が北庄城を攻撃した際、惣構を突破し、「本城」を攻撃したこと、勝家が市を焼き払って籠城したことをふまえるならば、北庄を取り込んだ惣構を有していたとは考えにくい。したがって、北庄城の惣構は城郭と給人居住域を囲繞していたとするのが妥当であり、北庄城下町は、商工業者の集住地区を惣構の外側に配置するいわゆる「町郭外型」に近い類型に分類される。た

だし、当該期において惣構内に居住する家臣の身分分化がそれほど進んでいたとはいえないことから、本研究ではこうした城下町の類型を「移行期町郭外型」と定義することとした。

◎については、わずかな同時代史料、寺社の由緒などを検討した結果、信長の侵攻以前から三ヶ庄には多数の寺社が所在していたこと、天正3年から6年にかけて一乗谷から多くの寺社が移転したこと、後者は北庄・石場・木田に寺地・社地を与えられたことが明らかとなった。

北庄城下町の到達点 北庄城下町は、安土城下町・大野城下町と同様、空間・社会的な一元化を達成した城下町であったことが明らかとなった。その一方で、大野城下町との相違点として、既存の町場である三ヶ庄を包摂するかたちで城下町を建設した点にある。これは、安土城下町との共通点として指摘できる。勝家がこうした城下町を建設した要因としては、権力基盤の脆弱性と、三ヶ庄の都市としての成熟が考えられる。

2つの要因のうち前者については、大野城下町と同様であり、地域の商工業者の直接的な掌握のために、三ヶ庄を城下町として包摂したと考えられる。一方、後者については、三ヶ庄が戦国期から都市として発展しており、城下町として包摂した方がより効率的に城下町を形成することができたことは確かである。すなわち、都市としての成熟が、かかる城下町を建設した要因とすることができる。さらに、勝家は、領国全体の復興と加賀国一向一揆の討伐を喫緊の課題として抱えており、大規模な人夫の徴発をとまなう新城下町建設は困難であったと推測される。

### (3) 織田政権の城下町の空間構造

以上の検討から、織田政権が天正初年に建設した、長浜城下町・安土城下町・北庄城下町・大野城下町は、いずれも空間的・社会的な一元化を達成していたことが明らかとなった。また、安土・北庄にみられるように、既存の町場が利用できる場合には、それらを包摂するように城下町を建設し、そうでない場合は、長浜・大野のように新たな城下町を設け、そこに地域の市町を統合したことがわかる。こうした城下町建設の手法が、織田政権の特徴であるとしてすることができる。

さらに、長浜・安土・北庄城下町は城下を二分する堀・土居・惣構を備えていた。先行研究では二分された状態をもって、織田政権は、戦国期城下町のもつ給人居住域と市町からなる二元的な空間・社会構造を克服できなかったとした。それに対して、本研究では、給人居住域と市町とを隣接して設けたこと、両者に直属の商工業者が居住することから、それらを「移行期町郭外型」の城下町として位置づけ、そうした形式の城下町を織田政権の城下町の到達点として位置づけた。さらに、武士と商工業者との身分の分化が進むことにより、給人居住域が武士身分の集住地区と

して限定され、「町郭外型」の近世城下町が成立するという見通しを提示した。

以上が、本研究の成果である。その一方で、今回は大野・北庄城下町という限られた事例からの考察にとどまっており、上記の見通しがどこまで妥当性を持つのかは確かめられなかった。今後は、さらに事例研究を進めるなかで、かかる見通しの可否を確認し、近世城下町成立についての理論を構築していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

登谷 伸宏、中近世移行期における大野城下町の形成について-織豊系城下町の成立に関する覚書-、建築史学、第66号、2016年3月、pp.2-23

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

登谷 伸宏 (TOYA, Nobuhiro)

京都橘大学・文学部・助教

研究者番号：40447909